鶴見文化財学会報
Tsurumi Cultural Properties A.C

vol.11
2010年３月15日発行
鶴見大学文化財学会

私の文化財

下　室　覚　道

昨年（2008年）４月より鶴見大学に奉職することになりました（現在２年目ということになります）。鶴見大学というと大本山総持寺が設立した曹洞宗門の大学であるという認識しかありませんでしたし、総持寺には何度かお参りしましたが、鶴見大学には学会が開催された折に一度お邪魔しただけでした。しかし、実際こちらにきますと、総持寺の静寂な雰囲気を味わうことができますし、梵鐘の音を間近に聞くことができるのは私にとっては感動的でした。

現在、曹洞宗と関係する大学は、駒澤大学、愛知学院大学、駒沢女子大学などがありますが、鶴見大学もその一つです。しかし、鶴見大学だけが寺院の境内にあります。このことは総持寺にある諸仏、諸菩薩が目に見えない力を我々に及ぼしていることを意味します。仏たちに囲まれながら仕事ができるというのは何と有り難いことかと感謝しています。

私の研究テーマの一つに道元禅師の「悟り」とは何かということがあります。道元禅師は渡宋し如浄禅師について学び、「身心脱落」という悟りを得て帰郷されました。この「身心脱落」について、総持寺御開山瑩山禅師は『伝光録』の中で、如浄禅師が坐禅中眠っていた僧侶を叱咤した時に道元禅師が身心脱落を得たと記されています。ところが、一方で曹洞宗には「修証一如」といって坐禅修行している時が「証り」であるという教えがあります。道元禅師は「仏法にはこれ修証これ一等なり」（『辨道話』）というお言葉があります。つまり、一般的には坐禅の修行をすることによって「さとり」が得られると考えますが、そのような捉え方ではなく、坐禅は単なる手段ではなく、修の中に証を見、証の中に修を見るのが「修証一如」なのです。これを押し進めると、先程の『伝光録』の記述も心的、一時的な「悟り」を認めるものだから「道元禅師の仏法を誤らせるものだ」という理解になります。これは大変難しく、繊細な問題ですが、私自身は『伝光録』の記述を正しいと考えています。そして、瑩山禅師についてさらに勉強しなくてはならないと感じています。ですから、鶴見大学に奉職するのは何か運命のような気がします。曹洞宗は道元禅師と瑩山禅師を両祖として共に信奉していますが、両者の思想的関係を学者が色々と議論しています。私は両祖がいるからこその曹洞宗であると考えています。

次に、鶴見大学文学部の文化財学科に属して思うことがあります。私は宗教学、仏教学が専門であり、文化財学科の中ではオーソドックスではありません。しかし、宗教と文化とは密接な関係がありますので、お役に立てればと思います。また、文化財学科の先生方は極めて温厚であり、学科内はとてもよい雰囲気だと感じています。その一因は、教員ひとすじの先生だけではなく、博物館、美術館、官庁などから転身した先生もいらっしゃり、多様性に富んでいるからだと思います。他の世界を知ることによって人間の幅が生まれるような気がします。

かくいう私は今まで僧侶の世界でしか生きてきませんでした。曹洞宗のお寺で育ち、大学から大学院、そして、曹洞宗総合研究センター（曹洞宗の研究機関）とずっと周囲を見渡せば僧籍のある方だけでしたから、鶴見大学にきて初めて一般の方々と触れあいます。また、仏教や宗教以外の分野の先生方と親しくさせていただくというのも初めてのことです。考古学・保存科学・美学・漆芸・城郭と分野が多岐にわたっています。そしてまた、20歳前後の学生さんと交わるのも、常勤としては最初のことです。このように、いろいろと初体験であり、まだまだ慣れていませんが、精進してまいる所存です。

ところで、私はヴァイオリンが好きで、子供の時分、「坊さんにヴァイオリンは必要ない」という親の反対を押し切って買ってもらいました。ヴァイオリンは音色もさることながら、形も美しい。眼根と耳根をともに楽しませてくれます（これは執着ですが…）。ヴァイオリンは楽器としての寿命が200～300年もあります。つまり、人間の寿命の３倍です。そして、200年位たつと音色も絶頂期を迎え、味がでてきます。ストラディヴァリやガルネリなどの有名なイタリア楽器は高値で売買されています。私の所有するヴァイオリンはそれに比べれば月と鼈ですが、私にとっては重要な文化財です。眺めるだけでなく弾いてあげなくてはいけませんが、最近は忙しくてなかなか触れることもできません。

さて、無常の世の中、維持するためにはメンテナンスが必要です。ヴァイオリンの場合は、スクロールや f 字孔が作者の特徴がでる部分なので特に重要だといわれます。ある先生が、文化財の修復に関して、修復することによって価値が失われるなら修復しない方がよいと仰っていましたが、まさにその通りだと思います。そのものの価値を発見し、見極め、そして価値を壊さずに維持していく。これが文化財学の醍醐味なのでしょう。

文化財学会
春季・秋季大会関連報告

〈春季大会〉
講演「石見銀山 世界遺産への道のり」

報告　3年　萩原　珠咲
　　2年　守屋　琴美

平成21年度春季講演会は、去る6月6日土曜日「石見銀山　世界遺産への道のり」と題し、島根県大田市教育委員会教育部長（前・島根県大田市石見銀山課長）である大國晴雄先生にご講演頂きました。

ユネスコでは他国の異なる文化を理解することが平和に繋がるという考えを基に、世界遺産はユネスコの国際会議で21カ国の委員国の合意によって登録が決定されます。登録のために最も重要なのは「顕著で普遍的な価値」を証明することです。また、世界遺産登録のためには“ほぼ”ではなく“完全”に保護されていることが前提です。

石見銀山は鉱山遺跡としてはアジアではじめての世界遺産です。考古学的に銀の生産の全プロセスが明らかなことも重視されたそうです。港から必要な物資を得て、山から銀を掘り、街道を通って運び出し、船で海を渡り博多や朝鮮と交易する、といった鉱業の生産から流通の前半までがここにありました。鉱山といえば暗く辛い労働の場という印象が強いですが、最盛期には簪を挿したり、煙草を嗜んだりと豊かな生活を送っていたことが発掘調査で明らかになっています。また近世の町並みは「伝統的建造物群」に指定され保護策がなされています。

石見銀山では銀の抽出に「灰吹法」が利用されていました。銀の鉱石に鉛を加えることで融点を下げ、余分なものを灰の中に溶かし込ませ銀だけを得る、という朝鮮から石見に伝えられたこの技術は、その後生野、佐渡と広まり貨幣をつくり、戦国の世を動かして行くことになります。16世紀、銀の価値は金の約7分の1でしたが、産出量は30倍もあったそうです。当時世界で流通していた銀のうち、約3分の1が日本産の銀でした。そのうちの大部分が石見で産出された石見銀だったと考えられ、石見銀山は国内外に強い影響を与えていたとのお話でした。

地元の大森町では50年以上も前から石見銀山の保護について取り組んでいます。1957年、全ての町民の方が加入する形で大森町文化財保存会が発足。小学校には文化財愛護少年団が設置され、1969年に国指定史跡とされる以前から、文化財としてずっと大切にされてきました。指定後は国内法による保護を受けることになり、研究調査、修復保存など、よりいっそう保護に力をいれています。現在では月に1度のワークショップ、役所の職員の方の勤務時間外の運動、日々の話し合いなど、地元の人と行政が互いに協力しあっています。

登録後、環境は観光客の増加に伴い変化せざるを得ませんが、大々的な急速開発はなく、環境を含めた遺産保護を優先にした整備を行っています。コウモリの生態や湿度などの坑道の変化を防ぐため、週に3日、1日10名しか参加できない限定ツアーもあるとのことです。警備会社のガードマンではなく地元の人々が「お助け隊」として解説や道案内などに対応しています。

石見銀山では住居と工房が共に存在しており、なおかつ薪灰資源としての木の伐採跡には植林がなされるなど、自然に多大な影響をあたえることなく人々は鉱山と共に生きたことも登録にあたって評価された点といえます。今も尚研究調査を進めつつ、環境保全の営みは続いています。石見銀山遺跡とその文化的景観は、一見地味にも見えますが、山を削ることなく採掘がなされ存在しています。また、町の中には水田や畑が少なく、鉱山があるゆえに人々がここに住んだと言える所に奥深さがあるそうです。そうした全てを含めて次代に伝えることが、完璧な保護といえます。先生は世界遺産のテーマとは環境と共生することとも言えるのではないか、とご指摘されました。

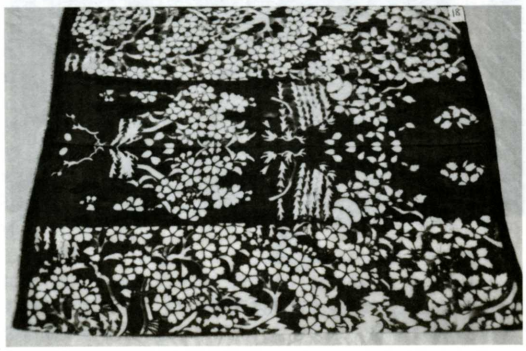
〈秋季シンポジウム〉
「中世板締め染めへのアプローチ」

報告　2年　守屋　琴美
1年　水落　絢香

平成21年度秋季シンポジウムは「中世板締め染めへのアプローチ」と題し、11月7日土曜日に開催されました。

最初に日本女子大学家政学部教授小笠原小枝先生から「中世の文様染め」という題でご発表頂きました。夾纈や板締染め（板染）という染色方法は現存する道具が皆無であり、かつて幻とされました。鎌倉若宮大路周辺遺跡群出土の染型板は貴重な資料といえます。模様の表現は時代によって異なり、若宮大路出土の型板のような模様密度の高い意匠は鎌倉時代例がなく、更に年代は遡ると考えられます。しかし鎌倉末期の絵巻に描かれた桜や柳の林立する様が染板と似ており、幾何学的に見せる表現とご指摘されました。夾纈や板染は間に布を挟んだ板を紐で縛り、板の凹凸で染料を通さない所が白く残ります。同様の布が相当数必要な舞楽の装束などは外来物だと思われますが、日本で作成したとも考えられます。型は必ずしも木製に限らず、紙を用いることもあり、また特に臈纈は熱伝導率が高く磨耗しにくい銅型が使用されていた可能性があると述べられました。

次に東京芸術大学大学院美術研究科博士後期課程李政垠氏に「上代夾纈の制作方法に関する研究」と題し、型板作成方法、布の種類や折り畳み方法、防染法、染色法についてご発表頂きました。この復元研究では現存資料と共に正倉院の夾纈裂を調査し、復元した夾纈布との比較分析が行われました。夾纈裂は版木と共に布を浸して染める浸染と、版木の穴に染料を注入する方法によって染められた物が混在しています。又、防染線（白抜きに防染された模様の輪郭線）の太さが均一な物は一対の版木で染色され、不均一な物は二対以上の版木を入れ替えて染められています。復元では版木は水に強く反りにくい桜を利用し、厚2cmの板が締め付けに適していると述べられました。布は平組織を用い、絹地で目の細かい物を水中で畳み、間に入った空気を押し出します。全体的に均一な防染のため、版木を麻紐で縛る際は板全体の圧力を均一にします。更に今後は海外の夾纈も比較考察する必要があるとご指摘されました。



続いて、本学非常勤講師の原田ロクゴー先生から「鎌倉若宮大路出土板締め型板の技法解明」と題し、板締め型板の染色技法解明を目的とした研究の経過報告をして頂きました。再現する技法は、摸刻型板に2つ折にした生地を挟み染色する「板締め染め」というものです。模様を凸彫りにし型板で挟み締めて染色することで地色が染まり、模様が白くあがります。均一な圧力で締めることが最初の課題であり、これこそがこの板締め染め技法のもっとも重要なことです。発掘されたオリジナルの型板同様に素材は檜を用い、生地は麻も試みましたが、絹を中心に試染しました。染料は現時点では均一な圧力に焦点を当てているため、扱いやすいインド藍を用いています。模様の白をより鮮明に仕上げるために補助的に糊を用いていますが、これも媒染染料での染色の場合には糊の選択を変える必要があるなど、試みるべきことは山積しています。この報告による22点の試染は技法解明の第一歩であり、今後は試染と考察を続け、中世染色の確かな情報を文献資料から渉猟すると共に、既存文献資料の熟読が必要だと論じられました。

最後に本学博士前期課程渡邊裕香氏から「染め重ね～染色における金属イオンの影響～」と題し、媒染に関する研究として二種媒染剤を用いて染め重ねを行い、その発色の違いについてご発表されました。試験には精錬絹、媒染剤には錫と銅、染料には刈安と茜を用いました。まず比較試料として各媒染剤を一種のみで染色した試料と、染め重ね試料としてこの二種媒染剤を使用し、工程を変えて二種類の試料を作成しました。実験では錫媒染を行うと銅媒染で受けた青色が薄れる変化が現れ、試料によっては激しい変化が見られるものもありました。これらの結果について錫媒染にはクエン酸を使用することから、クエン酸の影響を受けて銅媒染の青味が薄れてしまった可能性があると述べられました。しかし刈安は最終的に錫媒染のみの試料に近いのに対し、茜は変化が小さく銅媒染のみの試料に近い発色を示すことから、単純にクエン酸が存在するから布が受けた銅イオンの影響が失われてしまうと言い切ることはできません。また染料の構造によって金属イオンとの結合が異なるため、それぞれ影響しやすい金属イオンを持ち、その種類によっても発色に変化が起こると述べられました。

討論は本学教授である加藤寛先生を司会とし、聴講者の質問に答えると共に、補足説明も踏まえ行われました。

各学年の実習の感想

実習Ⅳ（国内）旅行記

岩橋　春樹

今年の実習Ⅳ（国内）は長崎方面を巡った。五島列島の福江島→長崎→平戸、生月島というのが概略のコースである。各所２泊ずつ、計６泊７日の行程であった。

古来、対外交流の拠点となった土地柄ゆえ、国籍多様な人々の足跡、各種の文化遺産が通史的に混在している。遣唐使船、倭寇、日蘭交易、仏教、キリスト教等々。しかも、それらの要素が無理に融合消化されることなく、それぞれ毅然と自己主張している点に特色がある。

以下、概要を箇条書き風に。なお、参加学生は男子が22名、女子が２名という一種硬派（？）のメンバー構成になったのは何故だろうか。引率教員は岩橋ほか、永田先生。そのほか、石田、伊藤の両先生が特別参加してくださった。

○五島・福江島

長崎港から福江港まで高速船（ジェットフォイル）で80分ほど。福江は五島の中心地で、現在は五島市となっている。東シナ海へ向かっての最前線として機能した島である。

中国・唐に留学した弘法大師空海ゆかりの大宝寺、明星院といった古寺が現存する一方、堂崎天主堂に代表されるキリスト教会が島内に点在する。明人堂、六角井戸は倭寇（といっても中国貿易商主体の多国籍水軍）の遺跡。そのほか、福江城は海防のため幕末期に築城されたもので、三方が海に面した独自の構えとなっている。現在は県立五島高校が建つ。ここの生徒はとても礼儀正しいことに感心する。

○長崎①　出島

史跡については、整備保存と観光という二つの立場の兼ね合いがなかなか難しい。その点、出島は一般向けのサービスに配慮しながら、計画的な復元整備事業が進められているようで好感が持てる。ただ、周辺が埋め立てられ、高層ビルの谷間に埋まったような現状からは、海に浮かんだ本来の姿はとても想像できない。四方に水面を確保する構想もあるらしいが、実現可能かどうか。

○長崎②　夜のツアー

石田先生恒例の特別見学行。長崎滞在中、夜の食事後、有志参加である。石田ゼミ生を中心に、一部の諸君は深夜近くまで有意義に過ごしたようだ。その時間帯、当方は別の用があるため、一切関知しておりません。

○長崎③　バスガイドさん

長崎から同道予定のバスガイドさんは何とも個性際立つ人であった。有り体に申すならばシルバーボランティア世代で、ガイド嬢用制服がいかにもコスプレ風のミスマッチ。その他諸々、平戸を含めて4日間、こちらの神経が耐えられそうもない。というわけで、バス会社に連絡をして、半日でお引き取り願った。

○平戸

公式ガイドマップによれば、歴史とロマンの島・大航海時代の城下町というのがキャッチフレーズである。長崎に先行して海外交易の拠点として栄えた。街並みや商店の構えなど、ひなびた風情をのこしている。

鄭成功居宅跡には台湾の人々がしばしば訪れる由。その近くには丸山の跡地も。長崎の遊里丸山の前身が平戸の丸山だということは今まで知らなかった。

○生月島・島の館

平戸島から更に橋を渡って生月島に入る。その生月の町立博物館が「島の館」である。小規模な館であり、A級の収蔵品を擁しているわけでもないが、運営等に見るべきものがあり、僻地場末の博物館に往々みられる眠ったような印象はない。

展示構成は、往時の主産業であった捕鯨とキリシタン信仰、二つのテーマが軸となっている。特にキリシタン関係では、潜伏時代におこなわれた土着的な古い信仰形態をそのまま継承している生月独自の様相が興味深い。納戸神、聖母子のお掛け絵、オラショなどが要領よく紹介されている。

そう、「生月の氷川きよし」を自称する館員氏にも再会することができ、丁寧軽妙な展示解説をしていただいたことも付け加えておかねばなるまい。

○カラオケ大会

最後の夜はこれも恒例のカラオケ大会を挙行する。毎度のことながら、初めは皆々遠慮がちに、やがて次第に盛り上がる。ついには舞台上に酔いつぶれる者も出る始末である。思いがけぬはU君の独演会状況。おいおいマイクを独り占めしてはいかんぞ。

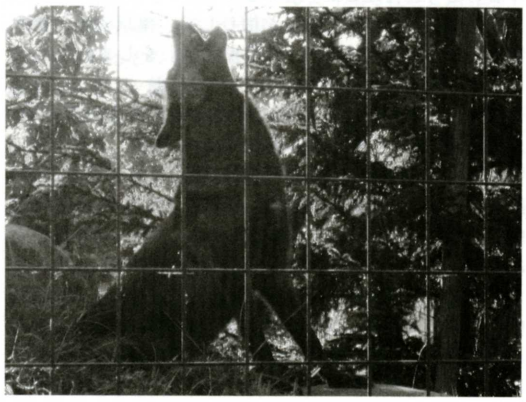
長崎・大浦天主堂にて

平成21年度実習Ⅳ（海外）巡研報告

加藤　寛

今年度の実習Ⅳはアジアを中心に猛威をふるっている新型インフルエンザの影響で、中国・ベトナム・タイ・ミャンマーなど訪問を予定していた地域に行くことができず、さらに参加者からの強い要望もなかったため、海を渡って北海道東部を対象として巡研を行った。一般的に北海道を訪れる機会は札幌を中心とした道南地域があげられるが、文化財の調査では網走から旭川を経由し、小樽に至る北海道横断のルートに集中している。そこで今回は考古史跡・先住民族・近代開拓史遺産に着目して巡研ルートを決定した。

はじめに女満別・網走地域では北海道立北方民族資料館を訪問し、アイヌやイヌイットなどオホーツク文化圏での先住民族の狩猟や居住などの生活文化について学習した。また、網走市立博物館では剥製や先住民族の生活用品展示などを通じ、現在では見られない北海道東部に生息した動植物の貴重な姿を目の当たりにした。網走市の郊外にあるこの博物館は紹介される機会が少ないが、その展示内容は見学した学生たちにとっては貴重な体験となった。翌日は網走市内の博物館網走監獄を訪れた。北海道開拓の歴史で忘れてはならない囚人たちによる道路開発など近代史の一端を展示しているこの施設は、昭和60年にオリジナルの五翼放射状平屋舎房を中心に庁舎・水門・裁判所法廷などかつて刑務所として使用していた施設を移築して展示している。明治45年に再建された舎房には最近テレビドラマ化された脱走犯のジオラマなど、単に建築だけでなく監獄内で繰り広げられた囚人の生活をも展示されていた。続いて訪れた旭川市では、北鎮記念館・兵村記念館では北海道開拓史で忘れてはならない屯田兵の活動が展示されている。さらに北鎮記念館では明治、大正、昭和などの北海道開拓と自衛隊とのかかわりについて館長による解説を受けた。最近、リニューアルした旭川市立博物館ではアイヌに関する最新の研究で明らかになった先住民族の総合展示が行われていた。近年の考古学的成果によりアイヌの人々が自ら鉄を鍛えて刀を作っていたことも展示からうかがえる。また、新たなアイヌの居住状態の展示も興味深いものであった。旭川市は木製家具の町として全国に知られている。しかし、家具の町に至るまで旭川の人々はたいへんな苦労をしたようだ。市内にある匠（たくみ）木工は昭和50年代の不況で倒産した。その時に４人の社員が工場の再建を図った。会社には材木と木工技術が残り、４人は再建に向けて何を作るかを毎日検討したという。彼らの出した結果は、自分たちが使いたいと考えたテーブルの板だった。今であればそれほど珍しいものではないが、当時、木の皮のついたテーブル板は誰も買うものではなかった。彼らは自分たちの使いたいテーブルを作って全国家具展に出品したが、誰も興味をもつものはなくすべて売れ残ってしまったという。翌年、彼らはまた自分たちの使いたいテーブルを家具展に出品したがやはり売れ残ってしまった。再建３年目に彼らはもう一度自分たちのテーブルを作り全国家具店に出品した。全国から集まるバイヤーの中では３年間も売れないテーブルを出し続ける４人の作品を「もしかして自分たちの知らないところで売れているのではないか？」という心理作用が生まれてきた。彼らの作ったテーブルは東京池袋の西武デパートの家具売り場に登場し、その年のベストセラーとして売れに売れまくった。再建の年には年間240万円の売買額だった弱小会社は３年目にして年商５億円の企業へと成長し、若い従業員を集めて見事に成功した。旭川の人々の飾らない粘り強い生き方がよくあらわれた話だと思っている。旭川市の郊外の旭山には小さな動物園があった。私たちが訪れた９月の１週目は残暑の照りつく日で園内は入園者であふれていた。入口の担当者の話では８月の夏休み期間はこの２倍の人々が来援したとのことだからたいへんな人気である。かつて人もあまり訪れることなく廃園寸前であった旭山動物園がどうして日本一の集客数を確保できるようになったのだろうか。先に紹介した家具の町になった旭川と同じ様な工夫と努力があったのではないだろうか。入園してみると旭山の斜面を縦に三分割し、アザラシ・ペンギン・猛獣館を西に、オオカミ・エゾシカ・チンパンジーを中央に、クモザル・カピバラ・オラウータンを東側にそれぞれ配置している。旭山動物園の人気は、たとえば「空飛ぶペンギン」では人間が水槽の中の透明通路を歩き、その上を泳ぐペンギンを見上げることができる。また「アザラシ館」では水槽から続く透明なチューブの中を高速で上りつめるアザラシの姿を写真撮影できる。あるいはまた「チンパンジー館」ではチンパンジーと観客の視線が同じ高さにあり、動物が人間を観察しているような錯覚を覚える。今までにない動物と人間の関係が展示を通して展開している。さらに工夫はそれだけではない。すべての動物の食事時間をタイムラグして、それぞれの施設内で動物の食事風景やしぐさなどなどを見ることができる。今まで飼育員のみが観察していた裏方の情報を表に出すことにより動物の持つ特性をうまく引き出している。また、子供たちが喜ぶミュージアムショップを展示館のすぐ隣に開設し、マスコット人形や動物アイテムがそこでないと買えないプレミアムを作り出すなど日本一の動物園ならではの企画が見られ、学生たちも大いに楽しんだことと思う。小樽市では運河沿いのホテルで幕末の海港都市を満喫することができた。とくに北海道近代美術館のエミール・ガレなど日本有数のアールデコのガラスコレクションから小樽市ではガラス製品が作られている。ガラスの資料館や販売場が並び日本の近代化を感じることができた。小樽市内には国の重要文化財の日本郵船や日本銀行小樽支店など和洋折衷様式の近代建築があり明治時代における日本の北方金融政策の一端も垣間見られた。小樽市郊外には鉄道関連資料を納めた総合博物館があり北海道開拓を近代的に推し進めた輸送・科学・歴史などが展示を通して学習できる。札幌市では北海道開拓記念館を訪ね、北海道開拓と先住民族に関する展示を見学した。さらに記念館に隣接する開拓の村では開拓史に関する建物や外国人指導者の居住跡など近代化遺産を回遊しながら、北方の厳しい自然とそこに営んだ人々の姿を見ることができた。今回の実習Ⅳは北海道のほぼ中央部を東から西に向かって考古遺跡、近代化遺産、先住民族史跡をめぐり日本の近代がどのように展開したかを学習した。たいへん内容の濃い巡研であった。



研究部会報告

江戸東京研究部会

江戸東京研究部会では「あるくと歴史がみえてくる」をモットーに近世の江戸、近代以降の東京に関わる地域を対象として巡検を中心に活動しています。

平成21年度は、4回の巡検を企画・実施しました。

第39回では巡検開港150周年を記念して川崎市市民ミュージアムにて開催されていました『横濱開港150周年幕末・明治期の川崎とニッポン』を見学しました。また同館の学芸員の方の協力により、バックヤードツアーが行われ、普段見ることのできない博物館の裏側や学芸員の仕事について深く知ることができました。

第40巡検は『裏鬼門から見る江戸』と題して、江戸城の裏鬼門の位置に建立された増上寺を中心に芝界隈を歩きしました。

第41回巡検では、『江戸・東京下町散策』と題し、東京の下町の歩きをしたほか、江戸時代から続くいせ辰で買い物をしたりしました。

第42回巡検では、品川歴史館の特別展『品川を愛した将軍徳川家光ー品川御殿と東海寺ー』の見学と特別展の舞台である、かつて広大な敷地をもっていた東海寺跡、家光がよく訪れていたという品川御殿跡があった御殿山周辺の巡検をしました。

史跡を巡るだけでなく、江戸時代から受け継がれている芸能や芸術にもふれながら，部員の興味関心を取り入れた巡検を行いたいと考えています。例会・巡検の詳細は、6号館地下の考古実習室前のホワイトボードに掲示してあります。お気軽に例会・巡検にご参加ください。

2009年度も巡検活動の充実を図るとともに、他部会との連携を深めた活動を行っていきたいと思っています。

古典芸能研究部会

私たち古典芸能研究部会は、今年の活動では、「装束体験」と「狂言鑑賞会」をしました。

2月に総持寺の紫雲臺をお借りして、東京成徳大学の青柳隆先生の指導の下で、「装束体験」をしました。テーマは「武士装束」です。

鎧兜をはじめとする直垂や裃姿など、武士の装束を、まず青柳先生に着付け方を説明して頂き、その後は、学生同士で着付け合い、各装束の着付け方を覚えます。鎧兜の着付けの順番や構造など戦を考慮した合理的理由や、背中を向けて逃げないために、背中の防具を少なくするという戒めや理念を、教えて頂きました。また、武士の礼服の使い分けや身分による違い、装飾品、他にも武士の作法（切腹の作法等）を学びました。

12月には、「狂言鑑賞会」をしました。横浜能楽堂では、毎月第2日曜日を狂言の日として、その日は狂言の公演をしています。私たちが観た演目は「伯母ヶ酒」「六地蔵」です。この公演では、始めに狂言師野村万蔵氏が、狂言について解説して下さりました。能楽と狂言の関係と違いや、狂言の種類、今回の狂言のポイントでは、狂言には珍しい面をつけた演目であること、若手狂言師の稽古では「伯母ヶ酒」の伯母と甥の会話の言回し方が重要であるなど、話されました。「伯母ヶ酒」「六地蔵」のストーリー説明があり、話の流れがわかりやすく、安心して楽しめました。

他にも香道体験や匂袋作り等、都合が合わずできなかった企画もありますが、部員の希望を取り入れて様々な体験ができるよう、活動していきたいと思っています。

宗教研究部会

私たち宗教研究部会は、立ち上げてから3年目になります。立ち上げ当初は、10名程度の部員しかいませんでしたが、現在では26名という、研究部会の中でも最多の部員数を持つに至っています。部員全員が、個性豊かでとてもにぎやかです。

今年度は部員の意見をとりいれ積極的に活動してきました。まず、毎年大船観音寺で行われている「キャンドルナイト」と「ゆめ観音アジアフェスティバル」という催しに今年も参加させていただきました。キャンドルナイトは広島の原爆の残り火を使い平和を祈るというものです。灯された幻想的な灯につつまれ静かな夜を過ごしました。

夏季休暇は宗教行事としての「祭り」に焦点をあて、巡検を行いました。関東でも歴史のある江戸の三大祭りの深川八幡祭りと鶴岡八幡宮で行われる例大祭に行きました。

深川八幡祭りは本祭・御本社祭・陰祭の順番で祭礼が行われます。今年は八幡様の氏子町会が協力して二ノ宮の神輿を担ぐ御本社祭にあたります。沿道から担ぎ手に水がかけられるところから「水掛け祭」とも呼ばれています。水掛けの現場は残念ながら実際に見ることはできませんでしたが、富岡八幡宮に奉納されている「御本社一の宮神輿」と「御本社二の宮神輿」を見ることができ、それぞれの大きさに圧倒されました。

鶴岡八幡宮祭では遠くからですが、流鏑馬も見ることが出来ました。

また仏教だけではなく、ほかの宗教も学んでみたいということで、「横浜・外国人墓地巡検」と題し山手にある教会や、中華街の中にある関帝廟や媽祖廟を見学してきました。

11月には「高尾山巡検」を行い、山頂まで登り薬王院を参拝いたしました。

冬季休暇には「都内巡検」と題し、明治神宮や靖国神社、浅草寺など参拝する予定です。

今年度は様々な場所に行き、多くのことを学べた1年でした。部員一人ひとりが活動を通して自分の課題を見つけ、取り組んでいけたと思います。来年度も行事を企画するとともに、研究という分野であることも念頭に置いて活動内容を深めたいと考えています。

美術工芸部会

歴史考古学研究部会さん企画の出雲大社や古代出雲大社歴史博物館を見学した他、美術工芸部会の企画として、長田染工場に訪れました。長田染工場は、明治時代に創業された130年以上続く歴史ある藍染による染工場で、風呂敷や手ぬぐいはもちろんのこと、ハンカチやテーブルクロスの染も取り扱っております。当初は、工場内を見学するのみの予定でしたが、実際に工場内にお邪魔したところ、工場のご主人とその奥さんお会いできました。お二人からは藍染の制作工程から、染工場の歴史まで様々な貴重なお話を伺うことができました。工場前を流れる高瀬川で糊を落とすなど、地元ならではの作業もあり、地元出雲に続く伝統を非常に大切にしておられることがお話の中から伺えました。

また、松江駅前の一畑百貨店では、地元の伝統工芸展が開催されており、そちらも見学をしました。茶器や花瓶、さらには家紋額などが展示されており、出雲の伝統工芸について、その種類を学ぶことができました。

島根は、出雲大社が有名ですが、伝統工芸についても、さまざまな技術が今日まで伝えられ、今なお伝承されていることがわかり、出雲の歴史についてより深く学ぶことができました。

今年度は、部員の都合等がうまくとれず、この合同企画のみとなってしまいました。今年度のこの反省を生かし、来年度からは合同企画だけでなく、美術工芸部会単独としても充実した活動をしていけたらと思います。

歴史考古学研究部会

歴史考古学研究部会は活動理念である「鎌倉を拠点とし、関東全域に目を向けた活動を基本理念とし、古代から中世を中心に、歴史についてあらゆる方面からの研究を目指し、活動を行う。」を意識しています。この活動理念を基盤とし、関東だけでなく部員の興味に合わせ、地域や時代に限定することなく活動を行ってきました。特に、巡検に力を入れた活動を行っています。今年度は鎌倉、横浜、島根・出雲巡検を行いました。

[鎌倉巡検]　3回行った鎌倉巡検では発掘現場見学、出土資料整理作業見学、鎌倉生涯学習センターで行われた第19回鎌倉市遺跡調査・研究発表会に行きました。発掘現場見学、出土資料整理作業見学では、実際に鎌倉で出土した遺物に触れさせて頂くなど、鎌倉で出土する遺物、遺構を実感しました。どの企画もはじめて参加した1年生から勉強になったと好評でした。

[横浜巡検]　横浜巡検では、パシフィコ横浜で開催された海のエジプト展に行きました。アレクサンドリア、ヘラクレイオン、カノープスの3つの古代都市ごとに発掘された遺物をみることができ、映像や体験などの展示方法の工夫もみられ、有意義な巡検となりました。

[島根・出雲巡検]　美術工芸研究部会との合同企画「島根県出雲巡検」とし、9月15日～16日の1泊2日で巡検旅行を行いました。玉作湯神社や出雲大社、島根県立古代出雲歴史博物館、長田染工場などを巡りました。1泊2日という短い巡検旅行でしたが、充実した巡検を行うことができました。

部員のほとんどが4年生であったため、今年度は予定していた巡検数よりも活動することができませんでした。しかし、1年生が入部してくれるなど進展ある年となりました。来年度は部員の興味、研究に合わせた巡検を重視するとともに巡検数を増やし、魅力的な企画を立て、活発に活動していきたいと思います。

鶴見大学文化財学会会則

1．本会は鶴見大学文化財学会と称する。
2．本会は鶴見大学文化財学科教職員・学生および卒業生、その他の関係者をもって組織する。
3．本会は文化財にかかわる人文・自然諸科学の学問交流を活発化し、会員相互の研究を推進し、かつ親睦をはかることを目的とする。
4．本会は総会を毎年一回開く。ただし必要に応じて随時会長がこれを招集することができる。
5．本会はその目的を達成するために次の事業を行う。
　1　研究等の発表
　2　講演会の開催
　3　会誌・会報等の編集刊行
　4　研究部会活動
　5　HP上での広報活動
　6　親睦その他の事業
6．本会に次の役員を置く
　1　会長（１名）は学科長に委任し、本会を代表し会務を統括する。
　2　委員（若干名）。委員は諸事業の企画運営にたずさわり、会員間それぞれで互選する。任期は一年とし留任を妨げない。
7．本会の経費は会費（年額千円）、寄付金その他の収入をもってこれに充てる。
8．本会は事務所を鶴見大学文化財学科合同研究室に置く。

付　　平成11年10月16日から発足する。
付２　平成16年４月１日　一部改正

平成22年度の年間行事予定

文化財学会総会及び春季講演会
　日　時　６月５日（土）
　　総　会　午後１時から
　　講演会　午後３時から
　会　場　鶴見大学会館メインホール
　講　演　「長崎の世界遺産」（仮）
　講演者　日高真吾氏
文化財学会秋季シンポジウム
　日　時　11月６日（土）午後１時から
　会　場　鶴見大学メインホール
　テーマ　「近世日本における
　　プルシアンブルーの受容」（仮）

編集後記

文化財学会報vol.11を無事に刊行することが出来ました。この会報が会員の皆様と学会とをつなぐ懸け橋となり、少しでも文化財学科の発展に寄与することができれば幸いです。また、刊行に際しましてご助力を賜った皆様方には、この場をお借りして篤く感謝申し上げます。

（三島記）

今号の巻頭緒言をお願いした下室先生をはじめ、昨年よりお世話になっている先生方との交流も深まり、研究部会など学生による研究活動も活発になるなど、文化財学科にも新しい風が吹き込んでいることを日々感じております。この会報を通して、会員の皆様に学会の様子がお伝えできれば幸いです。（福田記）

鶴見文化財学会報 vol.11　訂正とお詫び

鶴見文化財学会報 vol.11 に下記の誤りがございました。訂正をしてお詫び致します。

記

・P5　「平成 21 年度実習Ⅳ（海外）巡研報告」
　誤：2 倍の人々が来援したとのことだから
　正：2 倍の人々が来園したとのことだから

以上

また、非常用的な言い回し、漢字などは執筆者の表現を尊重するため、発刊した時の文章のままで掲載させていただきます。ご了承ください。